

(1) 『沖縄タイムズ』

\*【号外】 辺野古 新基地着工、ブイ設置 2014年8月14日 08:53

8月14日号外

【名護】米軍普天間飛行場返還に伴う名護市辺野古の新基地建設で、沖縄防衛局は14日午前7時半すぎ、キャンプ・シュワブ沿岸の海上に施工区域を明示するブイの設置を始めた。昨年12月に仲井真弘多知事が埋め立てを承認後、海上作業が本格化した。普天間飛行場の返還発表から18年、沖縄は重大な局面を迎えた。

地元の稲嶺進名護市長をはじめ、県内の反発が根強い中、防衛局は秋までに海底ボーリング調査を終え、結果を踏まえた実施設計をまとめる。本年度内に埋め立て工事に移る方針だ。

警戒を担当する漁船約20隻が午前6時ごろ、汀間漁港を出港。シュワブ内の浮棧橋近くでは、クレーン車で黄色のブイを船に積み込む作業が始まった。

新基地建設に反対する住民が乗ったカヌー13艇は午前7時ごろ、辺野古漁港近くの浜を出た。阻止行動を展開するとみられ、海保がゴムボートで近づき、浜へ戻るよう呼び掛けるなど緊張が高まった。午前7時半現在、沖縄本島地方には波浪注意報が発令されている。

台風の影響でスケジュールが遅れており、防衛局は作業を急いでいる。一方、反対住民は激しく抵抗する構えだ。

日米両政府は6月、シュワブ沿岸の常時立ち入り禁止区域を従来より大幅に拡大する形で、臨時制限区域(約561ヘクタール)を設定。同区域を明示するようにブイを設置し、進入した場合、厳しく取り締まる考えだ。

\*8月15日付け『社説』

社説[辺野古沖ブイ設置]時代に逆行する愚行だ

2014年8月15日 05:30

8月14日という日付を、抗議の意思を込めて胸に刻んでおきたい。「取り返しのつかない愚行」と「理不尽な蛮行」の始まった日として。

14日午前5時半すぎ、防衛省に雇われた漁師と民間警備会社の警備員が小型の漁船(作業船)に乗り込み、次々と汀間漁港を出港した。その数30隻以上。

前日に金武湾に集結していた海上保安庁の巡視船も作業開始に合わせて移動し、警戒態勢に入った。威圧的で異様な光景だ。海保のゴムボートだけでも20隻を超える。

反対派のメンバーはカヌーや漁船を繰り出し、抗議の声を上げた。木の葉のように波に揺れる反対派のカヌーと海保のボートが、海上でにらみ合う。

米軍普天間飛行場の県内移設に向け、防衛省は14日早朝から、名護市辺野古沖の埋め立て予定海域にブイ(浮標)とフロート(浮具)を設置した。なぜか。立ち入り禁止区域

を明示し、海上での反対行動を排除するためである。

ブイ設置が終わり次第、海底のボーリング調査に着手し、16カ所を掘削する予定だ。

政府の強引な姿勢は際立っている。防衛省は6月、キャンプ・シュワブ沿岸部の常時立ち入り禁止区域を大幅に拡大し、約561ヘクタールの広大な海域を工事完了まで臨時制限区域に指定した。

日米合同委員会の合意があれば、地元自治体や住民の意思にかかわらず、制限区域が拡大され、米軍のお好みの場所に日本の予算で、新基地が建設される。新基地が完成すれば、米軍に排他的な管理権が与えられ、基地の自由使用が認められる。

住民の権利は一体、誰が守るのか。

日本国憲法が本土・沖縄を貫いて等しく適用されているにもかかわらず、米軍基地が集中する沖縄では、国内法よりも日米地位協定と関連取り決めが優先される結果、国内法で保障された権利が制約を受けているのである。深刻な「構造的差別」だ。

日米両政府は、辺野古移設を「唯一の選択肢」だと強調する。しかし、防衛省が打ち出した佐賀空港へのオスプレイ配備計画は、普天間の機能を佐賀空港に移しても支障がないことを自ら白状したようなものだ。

森本敏元防衛相は大臣就任前の2010年5月、本社主催のシンポジウムで、こう語っている。「(海兵隊が)沖縄でなければならぬかといえばノーだ。軍事的には日本国内であればよい。政治的にできないから官僚が塞いでいるだけである」。

サンフランシスコ講和条約を批准した国会に、沖縄代表はいなかった。敗戦後の1945年12月に改正された衆議院議員選挙法によって米軍占領下の沖縄住民の選挙権が停止されたのである。

沖縄代表不在の国会で講和条約が批准され、講和条約に基づいて米軍は沖縄における統治権のすべてを手に入れ、基地建設に乗り出した。50年代には、日本各地に駐留していた米海兵隊が沖縄に移駐し、「太平洋の要石」と呼ばれるようになる。

そのような過酷な歴史を持つ地に、国家権力をちらつかせて米軍の基地を新設しようとしているのである。「理不尽な蛮行」というしかない。



日本生態学会の自然保護専門委員会委員長を務める加藤真・京都大大学院教授は、辺野古埋め立てを「取り返しのつかない愚行」だと指摘し、「沖縄の未来や希望と引き換えに何を守ろうとしているのか、理解に苦しむ」と強い調子で警鐘を鳴らしている(7月27日付朝日新聞西部版)。

実際、サンゴや海藻の大型群落が残る大浦湾や辺野古沿岸域では今も、新種の発見が相次いでいる。

県もこの海域を「自然環境の厳正な保護を図る区域」だと指定しているが、仲井真弘多知事は、「県外移設」という選挙公約に反して埋め立てを承認してしまった。

ブイ設置が始まったことについて仲井真知事は、「コメントのしようがありません。防衛

省に聞いてください」と、よそ事のように突き放した。もう関係ありません、と言わんばかりの態度である。あきれるしかない。

(3) 『琉球新報』2014年8月15日付

\* 「辺野古沖ブイ設置 埋め立て初の海上作業」

沖縄防衛局は14日、米軍普天間飛行場の名護市辺野古への移設に向け海底ボーリング調査に先立ち、立ち入り制限の境界を明確化するための浮標灯（ブイ）と浮具（フロート）の設置作業を開始した。政府は本年度内に埋め立て本体工事を着工する方針で、工事に向けた本格的な海上作業に着手した。調査区域を明確化するための海上作業は初めて。移設に反対する市民らの海上での抗議行動を排除する狙いがあるとみられる。ボーリング調査に使用するスパット台船は、すでにキャンプ・シュワブに搬入されており、ブイ設置作業が順調に進めば17日に掘削調査を開始する予定。14日はこれまでで最大となる300人以上の市民らがキャンプ・シュワブのゲート前に集結し、抗議の声を上げた。

防衛局は移設予定地に隣接するキャンプ・シュワブから作業船を出港させるため、シュワブ沿岸部に7月下旬に浮棧橋を設置した。台風の接近で一時撤去したが、今月11日に再設置し、海上作業の準備を進めていた。14日は市民らが18艇のカヌーを出して抗議活動を展開したが、海上保安庁がゴムボートなどで設置作業場所に接近しないよう警告し、市民らを事実上排除していた。巡視船や警戒船を含めると計約75隻が辺野古沖で警戒に当たった。

ブイ設置作業は15日ごろまで継続する予定だ。

「海保、カヌー2隻を強制排除」2014年8月15日

海上保安庁は15日、沖縄県宜野湾市の米軍普天間飛行場の移設先、名護市辺野古沿岸部の海上で、移設反対派のカヌー少なくとも2隻を港までえい航するなどして強制排除した。（共同通信）

\* 「稲嶺名護市長「激しい憤り」 政府を批判」2014年8月15日

南米出張中の稲嶺進名護市長は14日、米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設に向けた浮標灯（ブイ）設置などの海上作業が始まったことについて「激しい憤りを禁じ得ない」と政府を強く批判する談話を発表した。

1月に「移設阻止」を掲げて再選された稲嶺市長は談話で「政府は民意を無視し、地元の頭ごなしに計画を進めてきた」と指摘。政府が「地元丁寧に説明し、理解を得る」としながら、環境影響評価も不十分なまま埋め立て準備を進めているとして「地域の人権と生物多様性を踏みにじるものであり、民主主義国家の体をなしていない」と強調した。

その上で「今後も政府の暴挙に強く抗議し、『海にも陸にも新たな基地を造らせない』という信念を貫き、不退転の覚悟を持って臨む」と表明した。

(3) 『朝日新聞』2014年8月15日「厳戒の海、阻まれた抗議 ブイ設置強行 “脅しのよう” 辺野古移設、急ぐ政権 沖縄知事選前に「既成事実化」

特集・辺野古埋め立て申請

国の警備は、地元住民の目に異様に映るほど、嚴重だった。米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設へ向け、安倍政権が14日に始めた海上作業への抗議活動は、海上保安庁の厚い警備に阻まれた。「以前と違う」。政権の強硬姿勢に、移設に反対する人たちの間には憤りと驚きが広がった。

朝6時すぎ、辺野古の海を海保のボート20隻以上、雇われた作業用の漁船約30隻が行き交う。静かだった海は一変し、物々しい雰囲気にも包まれた。

反対派の市民らがカヌー8艇を連ねて作業現場をめざしたが、海保のボート約10隻がたちまち取り囲む。身動きがとれない様子だ。にらみ合いが続くそばを、米軍の水陸両用車の一群が通りすぎた。

反対派は船4隻も海上に出した。「PEACE」と書かれた旗を立てた2隻が立ち入り禁止区域内に入ろうとしたが、あっという間にボート数隻が目の前に立ちはだかる。「昨日までと全く違う」。乗船した反対派の男性（64）は悔しそうに言った。

10年前のボーリング調査は海上での激しい抗議活動を受け、中止に追い込まれた。その時の活動に加わった埼玉県的女性（63）は、今回もカヌーに乗った。

予報では波の高さは2・5メートル。数時間、波に揺られながら、10年前との違いを実感した。「前回なら国側も撤収するほど高い波だったが、きょうは構わず作業を続けていた」。当時の海保の態勢は、数隻が遠巻きに作業海域を見張る程度だったが、今回はすぐにカヌーに接近してきた。

(4) 『赤旗』2014年8月15日、「辺野古沖 ブイ設置強行 新基地反対排除狙う 住民ら海と陸で抗議」

沖縄・名護

防衛省沖縄防衛局は14日、沖縄県名護市辺野古への米軍新基地建設強行へ向け、米軍キャンプ・シュワブ沿岸の海上に、住民の海上抗議行動を排除するため工事水域への立ち入り禁止範囲を明示する浮標（ブイ）や浮具（フロート）を設置する作業を開始しました。新基地建設に反対する住民らは激しく抗議しました。

作業に対し、基地建設に反対する住民らは漁船やカヌーを繰り出し監視・抗議行動を展開。しかし、海上保安庁の巡視艇とゴムボートが取り囲み、住民を工事現場に近寄らせないよう威嚇しました。

政府は7月、シュワブ沿岸の常時立ち入り禁止水域を従来の沿岸50メートル沖から最大2キロまで大幅に拡大。キャンプ・シュワブ沿岸部の周辺海域約561万8000平方メートルを常時立ち入り禁止区域に設定しました。ブイの設置によりこの範囲を明確にし、

ブイを越えて制限水域内に入った場合、在日米軍施設・基地への進入などについて罰則を定めた刑事特別法の適用を含め、反対運動を弾圧する構えです。誰でも自由に利用できるはずの公有水面で日本政府の公共工事のための制限は、日米地位協定の目的からも逸脱しています。

防衛局はブイなどの設置後、埋め立て予定海域の計21地点でボーリング(掘削)調査を予定しています。

キャンプ・シュワブのゲート前では、約300人が集まり、新基地建設反対の監視・抗議行動が続けられました。

ヘリ基地反対協議会の安次富(あしとみ)浩共同代表は「防衛局が午前4時に作業を開始したことは、ジュゴンを保護するために作業時間は基本的に日の出1時間から日没1時間として提出した埋め立て承認申請を自ら破るもので許されない」と述べました。

#### 稲嶺市長「激しい憤り」

沖縄防衛局によるブイ設置について、出張中の稲嶺進名護市長は「本日早朝、沖縄防衛局がブイの設置を始めたことに対し、激しい憤りを禁じ得ない」とのコメントを発表しました。

コメントで稲嶺氏は「日本政府は、新基地建設に反対する民意を無視しつづけ、地元の頭ごなしに計画を強硬に進めてきた」と指摘。「地元への情報提供もないまま、埋め立てに向けた調査を強行することは、地域の人権と豊かな生物多様性を踏みにじるものであり、もはや民主主義国家の体をなしていない」と厳しく批判しています。

そのうえで稲嶺氏は「日本政府のこのような暴挙に対し、強く抗議するとともに、『海にも陸にも新たな基地は造らせない』という信念を貫き、市民・県民と力を合わせて不退転の覚悟を持って臨んでいく」との決意を表明しています。

(5) 【愛媛新聞】2014年8月13日<社説>「本来、国のスケジュールでは、着工は来年春のはずだった」

米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の名護市辺野古移設に向け、沖縄防衛局が海底ボーリング調査の準備を進めるなど、国は埋め立て作業に着手した。海上保安庁のゴムボート係留棧橋に続き、近く立ち入り禁止区域を示す海上ブイを設置する予定だ。

国はこれまでも沖縄の負担軽減を言いながら、強引な手法で辺野古移設手続きを進めてきた。県民の多くが県内移設に否定的な状況の中、今回の準備作業も、県民無視の有無を言わさぬ横暴な姿勢であり、看過できない。

本来、国のスケジュールでは、着工は来年春のはずだった。なぜこの時期に工事を前倒しする必要があるのか。国はまず、沖縄県民に説明する責任がある。同時に、抽象論でなく、負担軽減の実効的な政策を提示すべきだ。……

1月の名護市長選では、移設反対の稲嶺進氏が再選された。名護市民の、沖縄県民の総

意に他ならない。この時点で辺野古移設は白紙に戻ったはずだ。あらゆる状況が県内移設できる環境ではないにもかかわらず、着工にひた走る国の暴走は許されまい。

背景に、11月の県知事選があるのは間違いない。……………（2014年8月13日）